

彼女が海に出かけたら

タン塩レモンティー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

福田先生を好きな真礼は、先生から息子の泳ぎを教えてほしいと頼まれる。戸惑う真礼だったが、彼女はそれを了承し、三人で海に向かう。

そこでいろいろな体験を重ねて成長する、そんなひと夏の物語。

目次

彼女が水着を選んだら | 1

彼女が水着に着替えたなら | 9

彼女が年上お姉さんと出会ったら

16

彼女がお姉さんの思いを知ったら

21

彼女が海に出かけたら | 30

彼女が水着を選んだら

その時、私は十七歳で、そしてうだるような熱い夏だった。

『気持ちいいよ、ホント』

悪友がハイテンションでそう言っていた。海でもプールでもいい、思いつきり飛び込みたい。そう思った。けれど、今、私は泳いではいない。代わりに舟を漕いでいた。

午後の授業。舟を漕いだような様子のクラスメイト達を尻目に、窓からの光が、そんな彼を包み込んでいた。自分が何者かも分からない私にとって、その光は眩しくて、暖かい、まるで後光を背負った、神様みたいに思えた。何となく、見ているこちらまで、幸せになってしまいそうだった。

福田先生つていい先生だな。優しい眼をしていて、背が高く、笑った表情に胸がときめく。彼は奥さんがいなくなつたみたい。いつそ私がと思うが、そこは考えない事にした。

初夏の太陽はじりじりする。授業が終わると私は先生の手伝いをするために駆け出していた。ワイシャツをまくっていた福田先生が仕事の合間に何気なく言った言葉に、私は耳を立てる。

「真礼は夏が好きか？」

「はいっ！」

「そうか。ところで、真礼は泳げるか？」

「ええ」

「じゃあ、海へ行こうじゃないか！うちの息子を泳げるようにしてもらいたいんだ。嫌じゃなければお願いしたい」

突然の提案だった。私は驚いたけれど、すぐに嬉しくなった。

「……分かりました」

「よしっ!! 決まりだな」

福田先生が大きく笑う。つられて私も笑った。その日は夕方まで二人で仕事をした。私は先生と一緒に帰れると思ったのだが、彼はまだ用事があるらしくて先に帰ってしまった。

（残念……）

私は帰り道、一人で家路につく。先生も忙しいんだから仕方がない。でも、少し寂しかった。家に帰ってご飯を食べた後、水着を用意しようとダンスを開ける。

（どれにしようかな〜♪）

去年買った花柄のビキニを出して、鏡の前で体に当ててみる。

(似合ってるかな?)

きつと大丈夫だろうと思い、着ていた服を脱いで着替えようとした時……。ノックをする音が聞こえた。誰だろうと扉を開けると、そこにはお母さんがいた。

「あら? 真礼。今日はずいぶん可愛い格好をしているじゃない」

しまった! タンスの中に隠すのを忘れてしまった。どうしようと焦っているうちにお母さんは部屋に入ってきて、私の姿を見て目を丸くさせた。

「まあ♡ そんな大胆な水着を着て、どうしたのお?」

「ち、違うの……これは……」

「誰かに見せるために買ったんでしょ?」

「そ、それは……」

言えない。先生のためだなんて恥ずかしくて口には出せない。すると、お母さんは笑って肩に手を置く。

「お母さんね、嬉しいわ。あなたにもやっと好きな人が出来たんだねえ」

私は思わず無言になる。

「お母さんに任せなさい。明日、海へ行くための水着を買いに行きましようか」

「で、でも……」

「遠慮しないで。さあさあ、行きますよ!」

お母さんに押し切られる形で、私は次の日に一緒に買い物に行くことになった。

◇

翌日、約束通り私達は近所のショッピングモールにやってきた。休日なので家族連れが多く、子供の声や楽しげな雰囲気に含まれている。そんな中、私達親子は目的の店へとやってきた。

店内に入ると色とりどりの女性用の水着が並んでいて、見ていて楽しくなる。

(わあ〜っ！ 素敵！)

まず最初に見たのはビキニのコーナーだった。その中でも一際目立つ派手な赤色をした三角ビキニを手取る。

「これなんかいいんじゃないかしら」

「派手すぎない?」

「ううん、真礼なら大丈夫よ」

本当に大丈夫だろうか。私は不安になりながらも試着室に入る。カーテンを閉めて、水着に袖を通す。体にぴったり張り付く感覚がして、ちよつとドキドキした気分になった。胸元にある赤いリボンを結んで、鏡を見る。

(どうかかな?)

姿見に映った姿はなかなか良い気がした。

(これにしようかな)

私は意気揚々と試着室の外に出ると、そこにいたお母さんは満面の笑みを浮かべて褒めてくれた。

「まあ〜！ よく似合っているわよ。やっぱり女の子はこれくらい攻めないダメよねえ。真礼はスタイルもいいし、すごくセクシーに見えるわ」

「本当?!」

私は喜んで、今度はスカートがついた黄色のセパレートタイプの水着を選んだ。腰回りについたフリルが可愛いデザインだった。

「これも可愛い!!」

私が喜んでいると、後ろにいたお母さんは微笑ましい目つきを言う。

「真礼、よかったわねえ。じゃあ、次はどの水着にするのか決めようか」

それから、私はいくつかの水着を選んだ。どれも可愛い物ばかりで迷ってしまう。

「えつと……これが一番かわいいかな」

私は手に取った青いワンピース型の水着を見せる。背中が大きく開いていて、大人っぽい雰囲気がある。

「そうね。じゃあ、これで決まりね。店員さん呼んでくるから待ってて」

「えつ……?」

私は思わず声を上げた。

「お母さん、もう決めたの？ 他のも見てみたいんだけど……」

「だーめ。真礼、せっかく可愛い水着を買ったのだから、早く見せてあげなきゃ」

そう言っつて、お母さんはレジに向かって行っつてしまつた。仕方なく、私もその後を追うことにした。

（どうしよう。今から別のに着替えるわけにもいかないよね？）

困つたことになつたと頭を抱えていると、お母さんは店員に話しかけていた。

「すみません。この子のサイズに合わせてもらえるかしら？ それと、お会計はこのカードでお願いします」

「はい。少々お待ちください」

お母さんは慣れた様子で水着の入つた袋を受け取り、店の外に出る。

「さあ、帰りましょうか。後は帰つてゆっくり着替えるといいわ」

「あの……お母さん。水着、どうすればいいと思う？」

「あら、そんなこと？」

お母さんはクスクス笑つて私の手を握る。

「家に持つて帰ればいいじゃない。さあさあ、恥ずかしがらないで。ほら、行くわよ！

」

お母さんに押される形で、私は家に帰ることになった。部屋に戻ると、お母さんは早速買ってきた水着を取り出して私にあてがう。

「あら、やっぱり可愛いじゃない。それに、思ったよりも大胆ね。先生はきつと喜ぶわよお」

「そ、そうなのかな……」

「そうよ。お母さんに任せなさい！」

何を任せろというのだろう。私は不安になりながら、お母さんが満足するまで付き合おうしかなかった。

「はい、完成！」

鏡を見ると、そこにはいつもとは違う自分がいた。お母さんは買ってきてくれた水着を着せてくれて、私の髪を綺麗に結ってくれたのだ。

「どうかしら？」

お母さんは笑顔で言う。普段着ないような水着を着て、髪形を変えて、まるで別人のような気がする。

「すごい、私、こんなに変わるんだ」

「ふふ、当然よ。誰だって自分を変えられるもの。これからもどんどん変わっていけばいいわ。そうすれば、もっと素敵な女性になれるわよ」

「うん」

私は元気よく返事をした。楽しみだ。

彼女が水着に着替えたら

「じゃあ、行ってきますー！」

「はい。気を付けてね」

私は急いで学校に行く準備をして家を飛び出した。透き通った青空。今日は福田先生と彼の息子さんと一緒に泳ぎを教える日。私は、先生の自宅へ向かい、そこで合流する手筈だ。

でも、その前に先生にどうしても早く会いたくて、学校へ向かった。まだ時間には余裕があるな。

「おはようございます」

職員室に入ると、先生はすぐに駆け寄ってくる。忙しいんだな。

「真礼、おはよう。随分と早いね。何かあったのかい？」

「はい。実は……」

私は昨日のことを話した。すると、先生は驚いた表情をして言った。

「それは大変だったね。それで、どうだったの？」

「実は昨日、新しい水着を買ってきたんですよ。それで、早く見せたくて……」

私は苦笑いして言う。

「……まあ、君ならどんなものでも似合いそうだけどね」

「あ、ありがとうございます」

先生の言葉に照れていると、背後から聞きなれた声が聞こえてきた。

「ちよつとあなたたち。朝っぱらからイチャイチャしないでくれる?」

振り返ると、そこには美鈴ちゃんがあった。彼女は腕を組み、呆れた目つきをしていた。

「み、美鈴ちゃん!? どうしてここに?」

「別に。ただ、あんたがまた勝手な行動しないように見張っていただけよ」

「ええ」

私が不満を言うと、先生は慌ててフォローしてくれる。

「こら、二人とも喧嘩してはいけないよ。それじゃあ、真礼。また後で」

「はい。失礼します」

私は一礼してから職員室を出た。その後、私はすぐに更衣室に向かった。そして、個室に入って鍵を閉める。

(よしっ)

私は意を決して、先日買ったばかりの水着を着た。背中が大きく開いているため、少し恥ずかしかったけど、気にしている場合ではない。

(大丈夫……だよな?)

鏡を見ながら自分の姿を確認する。

(うん。問題ない。)

これならば、先生も喜んでくれるかもしれない。私は期待を込めて更衣室を出る。それから、先生に会うまで高揚していた。気づけば先生の自宅のすぐ近くまで来ていた。確か、先生の車は白い軽だっけ。

「待たせたな!」

正面の方から福田先生の声が聞こえたのでそちらを見る。すると、停車している白い軽の側に、ジーンズパンツにTシャツ姿の先生が立っていた。先生は落ち着いた笑みを浮かべ、こちらに大きく手を振っている。隣に居るのは、息子さんかな。

「は、初めまして、福田朗希です。よろしくお願いします」

自己紹介した朗希くんは私に軽く頭を下げる。ちゃんと自己紹介できて偉い。私は自然と朗希くんの頭を撫でる。そんな私を先生は微笑ましそうに見ている。

「先生、免許取ったのは大学の冬休みだったな。学生時代は長い休みの期間とかになると、レンタカー借りて、友達と一緒に旅行に行ったり、就職活動で使ったんだ」

私はそんな先生の思い出話をわんぱく坊主を背に聞いている。

「就職してから運転する機会は減ったけどね。今の学校は家から近いし」

落ち着いた笑みでそう話す先生。最近はあまり運転していないようだが、先生の様子を見る限りでは大丈夫そうかな。

「海だー!」

朗希くんが大きな声を上げて興奮していた。私も感激した様子で海を眺めていた白い砂と青い海の明るい景色がゆったり落ち着き払っていた。駐車場で車から降りて少し歩く。

今は夏休みの真つ最中。今日はよく晴れているので、海水浴場には多くの人が遊びに来ている。パツと見た感じ、家族連れやカップル、学生と思われる若年層数人のグループが多い。

私達は人がまばらな端の方を陣取ることにした。ここなら落ち着けるしいい場所だと思う。朗希くんは砂浜の上にカバンや衣類を無造作に投げた。

私は学校で水着に着替えていたので上着を脱ぐだけで済んだが、髪型は整えなかったので更衣室に入った。改めて思ったがまるで男の子だな、私。

青いワンピース型の水着姿の私を見た瞬間、先生は大きく表情を変えた。この水着を選んで良かったと思う。

「あ、あの……どうですか?」

私は思い切つて聞いてみた。すると、先生は嬉しそうに微笑んでくれた。

「ああ、とても素敵だよ。よく似合っている」

「本当ですか？」

「もちろんだとも。すごく魅力的だ。この姿を他の男に見せたくないくらいだよ」

「そ、そんなことないって……」

「本当に可愛いよ。だから、もう少し自信を持っていいと思うよ」

「はい……」

先生は私の頭を撫でてくれる。私は幸せすぎて昇天してしまいそうだった。

「あ、ありがとうございます」

私は笑顔を浮かべて歩き出す。お辞儀をしながらもう一度感謝を伝える。

「あ、でも、あまり他の男性には見せない方がいいかもね」

「え？　なんで？」

「いや、その、ほら、君は可愛いからさ。そういう格好をしていると、変な連中が寄つて

きそうだと思うってね」

「ラノベのラブコメならよくある話ですね」

私の振りに先生はこめかみを押さえる。そんなに!?

「例えば、君のクラスの担任とか」

「あー、確かに」

福田先生は冗談っぽく言っているが、彼の場合は本気で言っているようである。担任よ、すまん。

「早く行こう」

「分かりました」

私は再度頭を下げて、朗希くんとともにその場を去る。私は彼に泳ぎを教えた。彼は覚えが早かったからか、すぐに泳ぎをマスターし、泳ぐ姿を私に見せては得意げな表情を見せていた。

私は海中でほほえましく眺めていると、蒼ざめた少年が飛び出してきた。それは一瞬私の眼には朗希くんに見えたが、違った。その子がやってきた方向に目を向けると、朗希くんの様子がおかしかった。

（流されてる！）

彼は水中でもがいているけれど沈んでゆくばかり。私は一目散にその方向に泳ぎ始めた。波の抵抗をかくぐつてなんとか彼のもとへたどり着くと、抱きかかえて海岸へ泳ぎ出した。体の言うことが聞かなかつたけど、今はそれどころではない。

そこへ屈強な男性と身体が引き締まった女性が泳いできた。二人はライフセーバーのようだ。さっきの少年が呼んだのかもしれない。

「はあ……」

浜辺に着いたとき、彼の意識はあるものの疲労困憊だった。呼吸はあるようなのでひとまず安心したが、彼の体は熱く、全身びっしりと濡れていた。この様子では体温を奪われてしまうだろう。

「大丈夫ですか!?!」

誰かの声だ。振り返ると、そこには先ほど彼を助けたライフセーバーであろう若い女性がいた。彼女は私たちを見て少し驚いた顔をしていたが、すぐに気を取り直して言った。

「クラゲに刺されたみたいね」

そうして彼女は素早く応急処置を済ませると、朗希くんの頬に温かみが戻った。

「……風邪ひいちゃうわ。良ければ私の家に来て。着替えもあるし、温かい風呂にも入れるからさ!」

彼女はもう一人のライフセーバーに言伝を頼み、彼から両手でマルの合図をもらったことを確認してから歩き出す。私たちは彼女についていった。福田先生にもお辞儀をして、先生は頬を掻いていたが、どんな関係なんだろう。

女性の名前は相田紗季さんといった。今は一人暮らしをしており、近くに住んでいるという。

彼女が年上お姉さんと出会ったら

「こつちよ」

部屋に入るなり、朗希くんは浴室に連れて行かれた。彼は服を脱いで浴室に入る。

「ふうー……」

湯船の中に体を温まった彼は冷えた体に温かさが染み渡ったようだ。

「よかった、元気になったみたいね！じゃあお姉さん、ちよつと出かけてくるけどすぐ戻るから待っていて！」

そう言っ出ていった紗季さんの言葉通り、それから五分も経たないうちに戻ってきた。手には白いバスタオルや新しいシャツ、ズボンを持っていて、それを彼に渡しながら話しかけている。

「どう？まだ寒い？」

「もう平気です。ありがとうございます」

「いいのよそんなこと……。でもまさかあんな沖まで行くとはねえ！」

「本当に助かりました。僕一人なら間違いなく死んでいました」

「あはは、大げさだな」

二人は笑顔で話している。そしてまた紗季さんは話し出した。

「これからは気を付けること。いい」

「はい……」

紗季さんが朗希くんの頭を撫でる。

「でも君が無事で良かった。それじゃ、今日は泊まっていきなさい」

「え、いいんですか？」

「もちろんよ！それに君のことも心配だし、何より私が一緒にいたいし！」

「でも、僕はお父さんと来ているから、勝手には決められません」

その時、さっき助けしてくれたライフセーバー、数人の地元に住んでいるであろう高齡者の集団が玄関前に来た。私は廊下の奥のほうに隠れるように耳を傾ける。

「この娘と福田先生はこの町きつてのインテリゲンチヤアじヤのお」

「でも相田のオヤジもインテリ娘の片がついてほっとしとるじヤろ」

「福田先生も辛いとこだね。ここに長くおる気はないじヤろうけど、まさか紗季に惚れられるとはねえ」

彼らの高い笑い声が聞こえる。遠慮している感じじヤない。その時、後からやって来た先生に気づいた紗季さんが駆け寄る。

「今日は遅いし、朗希くんもこんなんだし、泊っていきませんか」

先生は少し思案してから、首を縦に振った。紗季さんの表情が心なしか明るくなる。
「……はい！よろしくお願いします！」

彼は勢いよく頭を下げた。私は思わず微笑んだ。その後、朗希くんと一緒にリビングに行くのと、テーブルの上には豪華な料理の数々があつた。

「おおー！」

「すごいですね」

「ふふん、これくらい朝飯前よ！好きなら食べたいわよ！」

私たちの前に並べられたのは和洋中の様々な種類のご馳走。どれもとてもおいしそうだ。

「いただきます!!」

私たち四人は夕食を食べ始めた。食事中、紗季さんの学生生活の話を知ると、彼女は地元の大学に通っているらしい。勉強はあまり得意ではないが体育が得意らしく、その身体能力を生かしてライフセーバーになっているとのことだ。

「すごいですね」

「そんなことないって」

紗季さんは豪快に笑いながらご飯を食べ続ける。その後も会話は続き、やがて夜が更けてきたところで紗季さんの家のお風呂を借りることになった。

「お先に失礼しました」

「ああ、俺が最後か」

そう言つて今度は先生がお風呂へ向かった。私は急いでドライヤーで髪を乾かす。

「ふうー、あつたまるなあ」

先生はお風呂に浸かっている。気持ちよさそうだ。しばらくして先生が出てきた。

やはりこの人はかなり長身なので、普段着だと体格の良さがよくわかる。

「先生、お風呂はどうだった？」

「最高だよ」

先生は私の長い黒髪に目をつけた。

「ん、綺麗な髪だな。……あ、これ、セクハラか？」

私は思わず赤くなる。

「構わないです。邪魔になるので切つてもいいんですけど、お母さんに似てるから切るのもなんだかなつて思つて」

「そうか。まあ、俺はこの髪型似合つてると思うぞ。真礼の母親のことは知らないけどさ、きつと喜んでるんじゃないかな」

先生は少し照れくさかったのか、頭を掻きながら言った。

「……はい！」

「よし、じゃあそろそろ寝るか。もう遅いし」

紗季さんは私たちを寢室に案内した。彼女はそこに三人分の布団を敷いてくれた。

「じゃあおやすみ！」

彼女は隣の部屋に入ってしまった。

「おやすみなさい」

私たちは挨拶をし、それぞれの布団に入った。虫の音が静かに響き渡る。電気を消してしばらくすると、隣から声が聞こえてきた。

「真礼さん、起きてる？」

「なんですか」

私が振り返ると、そこには小声で囁いた紗季さんがいた。

彼女がお姉さんの思いを知ったら

紗季さんは私を覗き込むように話しかける。

「ねえ、今から二人で星空を見に外に出てみない？」

「二人きりで？ うーん……」

紗季さんが悲しそうな表情をしながらつぶらな瞳で見つめている。私が悪いことしているみたい。

「冗談ですよ」

「やった！」

右手をガッツポーズしながら破願した。

「じゃあ行こうか！」

「はい！」

こうして、私と紗季さんは家を出て、近くの山まで歩いた。

◇

「わあ、きれいだ！」

麓にたどり着くと、そこはあたり一面満天の星空が広がっていた。涼しい風が頬を撫

でるように過ぎ去る。周りには街灯がなく、星の輝きだけが私達を照らしている。

「私、こういうところに来るの初めて！」

「へえ、じゃあ初体験だね！」

「……はい！」

「耳年増♪」

頬を赤らめた私を見たのか、彼女が耳元で囁く。今夜は蒸し暑いな。

「こんなに綺麗な星を見たのは初めてかもね」

紗季さんは小さく笑いながら呟く。綺麗な星々が夜空に煌めいている。こんな綺麗な星が見えるのは明かりが少ないからこそだろう。私が住んでいる町じゃこれだけ綺麗な星はなかなか見られない。

などと物思いにふけていると、彼女が語りだす。

「真礼さん、福田先生のこと好きでしょ」

「ち、違いますよ！」

「ま、そういうことにしといてあげる♪」

慌てて手を振りながら否定する私に、紗季さんは悪戯つ子みたいになやける。……分
かりやすいの!?! 私。

「実は私、好きな人がいてさ」

「えっ!？」

私は驚いて紗季さんの顔を見た。顔を赤く染め、恥ずかしそうに下を向いて話していたが、彼女の瞳を見つめると、満点の星空を見ているような気がして、今にも吸い込まれそうになる。

「その人は大人っぽくって優しくって、いつもみんなのことを考えてくれていて、私が困っているときは助けてくれるんだ」

私は紗季さんの話を黙って聞く。邪魔をするものは何もない。

「だけどたまに抜けていたり、ドジだったりするところもあるんだ」

「意外ですね」

「もう、私だって乙女だよっ!」

紗季さんがむくれながら、でも、心の底から楽しげに話している思い人のこと。その人ってまるで福田先生みたい。……あれ、なんで痛むの？

「でもそういうところが可愛くて、放つとけなくて、好き。ずっと一緒にいたいって思う」

「素敵な恋をしていますね」

「うん。だから私は全力で向かうよ。それに、相手と並び立つには、立場を考えたり、尊重することも大切」

紗季さんは微笑むと、天を仰ぐ。

「例えば、私の思い人が社会人だったとする」

彼女は一呼吸してから続ける。

「私はまだ学生だから、その立場は本当の意味では分からない。けど……、彼といるなら、理解が必要だと思うんだよね」

「……応援します」

「ありがとう」

彼女は嬉しそうに微笑む。見上げる空には、満天の星が輝いている。でも真っ暗。

「それにしても、ここは本当に静かですね」

「うん。でも、まだまだ私は身近な存在の魅力を知らないんだなって、思い知らされちゃった」

「どういう意味ですか？」

「ふふん、それは秘密！」

紗季さんは悪戯っぽい笑みを浮かべながら人差し指を口に当ててる。

「えー、教えてくださいよ」

「ダメ！」

「けちっ」

紗季さんが微笑みながら私のおでこをデコピンする。痛っ！

「女はみんな秘密を持っているものだよ。真礼さんもそうじゃないかな」

「……まあ、ね」

「さ、帰ろうか」

「はい」

私たちは来た道に戻った。どんな流れでこの話題が出たかは忘れたが、先生が雑談で言ったことを思い出す。

『昔の哲学者、ソクラテスは「無知の知」を唱えた』

ああ、その通りだ。人を愛する意味も、本気で向き合う覚悟も、何にも知らなかった……。でも、紗季さんも似たような想いはあったんだ……。

「あ、流れ星」

「どいっ？」

「ほら、あそこ」

紗季さんは微笑みながら空を指さす。

「あつ、ほんとだ。お願い事しないと」

「何をお祈りするんですか？」

「真礼さんは何を祈るの？」

「うーん、……内緒です」

「そっか」

紗季さんは目を瞑って、両手を合わせた。私もそれに合わせる。

「私と一緒にいる未来がありますように！」

私は思わずっこけた。

「あれ、反応なし？ さーみーしーいー」

「というか、子供っぽいですよ」

「いいじゃん！」

小さく息を吐いてから私たちは再び歩き始めた。外は少し寒くなっていたけれど、私の心は暖かく包まれていた。

「ところで、先生とはどうですか？」

「まあ、順調だよ。……あっ」

何かに気付いたのか、紗季さんは気恥ずかしそうな様子で両手で口を覆う。

「……バレバレ？」

「……それは、もう」

彼女はそれを誤魔化す様に続けた。

「今日、手料理を振る舞ったんだけど、美味しくできたと思う」

「へえ、先生どんな表情してました？」

「それが、あんまり表情が変わってなくてね」

「でも、福田先生、喜んでいましたよ」

「へえ……」

紗季さんが一瞬真顔になったのを見逃さなかつたが、すぐ明るい表情に戻る。

「もつとこう、分かりやすくして欲しいな」

「例えば？」

「笑顔とか、照れた顔とか。あと、抱きついたりとかね！」

「ハグならしてあげますけど？」

「違うの。てか、ハグしてるの！」

「いやしてませんって」

紗季さんはその場に崩れ落ちる。私は右手を横に振る。

「……私、魅力ないかなあ」

「あ、あの、元気出してください」

「……ぐすつ」

「泣かないでくださいーい！」

私は慌ててハンカチを取り出して、紗季さんの涙を拭く。すると、彼女は立ち上がっ

て、私に向き直る。

「ごめんね、取り乱しちゃって」

「全く、紗季さんは甘えん坊ですね」

「じゃあ、慰めて」

「えっ」

彼女は少し背伸びをして、私を軽く抱擁した。私は顔を赤くしながら、彼女を抱き返す。

「ありがとう」

彼女は名残惜しそうに身体を離すと、そのまま腕を組んできた。

「これなら寂しくないし、温かい」

「分かりましたよー！」

星空の下で、私は照れくさくなりながらその腕を組み返した。私は紗季さんの温もりを感じながら、家路についた。

そういうえば、ずっと前、紗季さんと先生と並んで歩いているのを見たって、さつき誰かが言っていたな。先生の奥さんになるのが紗季さんだとしたらなんだか複雑。それでも、彼女は凄く魅力的なのは昨夜の会話や振る舞いでこれでもかというほど伝わった。私なんかが入る余地がないくらいに。

奥さんになるってのは、お互いを大事にして尊重するってことだ。福田先生は紗季さんを好きなんだろうか。

彼女が海に出かけたら

翌朝、目が覚めても胸の中がモヤモヤしていた。もう起きようと思つてベッドから這い出たけれど、まだ夜明け前だ。スマホを見るとSNSの通知があつたらしくライトがついている。それを開くと、やっぱり美鈴ちゃんだった。

『ゆうべはお楽しみだった？』

私は『ぼーか』とだけ返信してから、布団に突つ伏したが、眠れなかつたので朝の散歩をすることにした。すると、福田先生がそこにいた。私は意を決して近付く。

「ちよつと海岸に行きませんか？」

私はちよつとそこにいた福田先生を誘うと、先生も頷く。

二人は砂浜へ歩いて行つた。空を見上げると、ゆつくりと明るくなりつつある空模様が、静かに見守つているようだ。

私は砂浜に座り、静かに佇む。

「良かったです。先生と歩けて」

穏やかに、一言一言噛み締めながら、口を動かす。先生は黙っているが、小さく揺れているみたいだ。

「もう一緒に歩けないかと思つていましたから……」

「真礼、どうした……?」

彼は胸が苦しそうな仕草を微かに見せる。気持ちが徐々に重くなる。

「……好きです」

空気の流れが止まったかのような静寂が訪れる。断られるとか、そんなことは考えていない。

「……それは受け入れられない。でも、気持ちは嬉しい」

「私たちは生徒と教師なんですから!」

……うん、想定内だ。むしろ、告白を受け入れたら、間違いなくドン引きした。

なのに、頬をつたる液体がしょっぱい。そもそも、覚悟完了して今ここに居る、……
筈だったのに。

「想い人の手を離しちや駄目ですよ」

私は精一杯笑いながらウインクした。先生の表情が大きく動く。

「……僕からは離さないよ。……離されるかもだけど」

「そうならないように、ね」

私はゆつくりと先生に向かって歩き出す。そして、断ち切るかのように先生の肩を力強く叩く。去り際に先生から目尻を撫でられた。

「……時間を取らせてごめんなさい」

私はそう言いながら、すこし悲しそうな笑顔を先生に向けた。その笑顔が、彼の胸をさらに苦しめていくような気がする。

「たまにいいですから、またこうして歩いてくれたら、嬉しいです」

先生の表情は見えなかつたけれど、右手でこめかみを押さえつつも僅かに口角を上げた、ような気がした。

立場を全部すつ飛ばせるなら、自分が一緒に歩きたかつた。さっきの散歩で嫌と言うほど思い知らされた。歩くだけで、これほどまでに満たされるとは思つてもいながつた。

私はお辞儀すると、笑顔のようなものを残して、その場から全速力で走り出した。

◇

帰つてくるといい匂いが部屋を満たした。朝食だろう。

「真礼さん、起きてた？」

「おはようございます」

お箸を持った紗季さんが顔をのぞかせている。昨夜の出来事が嘘みたいだ。私は一息ついてから、リビングへと向かう。福田先生と朗希くんはもう座つて待つていた。

「みんな揃つたな。じゃあ『いただきます』」

四人の声が響き渡った。私と先生の間でさつきあつたことはおくびにも出さず、朝食はつつがなく終わった。

食事を終えてから、私達は車に乗り込んだ。後部座席に紗季さんと並んで座り、福田先生がハンドドルを握る。

「今日はどこに行くんですか？」

「まあ着いてからの楽しみということ……」

福田先生がもつたいぶる。何なんだろう？　しばらく走つて、車は住宅街へと入つた。どうやら目的地はこの先らしい。やがて車が止まつたのは大きな門の前だった。

「着いたよ」

「……え？」

紗季さんが声を上げる。車を降りるとそこは広い庭のある立派な家だった。玄関には表札がない。ここは一体……。

私が首を傾げている間に、福田先生がインターホンを押す。すると中から女性の声が聞こえてきた。

「こんにちは、福田といいます。昨日ご連絡した通り、連れてきましたよ」

「待っていました。今開けますね」

そう言つて女性は鍵を開ける。そして扉を開いた瞬間、パン！　という音が鳴り響い

た。クラツカーの音だ。カラフルな紙吹雪が舞い散っている。その先には笑顔を浮かべた五人の男女がいた。

「ようこそ！ 我が家へ！」

目の前で手を叩かれたような衝撃があった。言葉を失う私の横で、紗季さんが口を開く。

「お父さん……お母さん。……どうしてここにいるの!？」

彼女は呆然と眩く。どうやらこれはサプライズイベントらしい。

「実は紗季の誕生日パーティーの準備をしていたんだ。なかなか予定が合わなかったけど、ようやく全員休みが取れてさ。こうして集まってもらったんだよ」

「そんなこと一言も言っていないかったですか！」

「言ったらサプライズにならないじゃないか」

福田先生の言葉に紗季さんが食ってかかる。しかし彼は動じることなく言い返した。そこへ女性が割って入る。

「ふふつ、二人とも相変わらず仲が良いわねえ。さあ、早く始めましょう」

彼女の言葉で空気が変わった。再びクラツカーが鳴る。それからは大騒ぎだった。

テーブルの上にはたくさんの料理が並べられていて、どれも美味しそうだ。特にメインディッシュであるローストビーフなんか絶品で、いくら食べても飽きない気がする。

気づけば私は夢中で肉を切り分けていた。

「真礼さん、野菜も食べなよ」

朗希くんに肩を叩かれて注意されてしまった。うう……お腹いっぱいなのに。

「それより、昨日クラゲに刺されたのはもう大丈夫なの？」

「そんなの関係ねえ」

彼はかなり昔に流行ったギャグをかましながらサラダを食べ始める。レタスの食感を楽しんでいた。ドレッシングも手作りらしく、とても美味しくて平らげてしまった。

ホント、年相応なんだか、大人びてるんだか分かんないなあ。

……あ、私もじゃん。福田先生のことを好きだって自認していたのに、紗季さんと先生の楽しそうな様子を見ていると思わず口角が上がっている。

「ところで、この子は？」

紗季さんのお母様らしき人が尋ねてくる。紗季さんはまだ来ていないようだ。代わりに私を紹介することになった。

「初めまして。橘 真礼と言います。紗季さんとは仲良くさせていただいています」

「あら、ご丁寧にありがとう。私は紗季の母です。よろしくね」

「はい」

緊張しながら返事をする。すると父親らしき人が話しかけてきた。

「あちらの男性は紗季の恋人かな？」

恋人という言葉聞いて心臓が大きく跳ねる。彼は先生を見ながら話す。向かい側に座っていた白髪の女性が目を細める。おそらくこの人は祖母だろう。優しい雰囲気。

「違いますよ」

「えっ？ そうなのか!？」

なぜかホツとした様子のお父さん、それを見て祖母が目尻を細める。

それから料理が次々と運ばれてくる。食事中はあまり会話がないのかと思っただけだ。そんなことはなく、いろんな話で盛り上がった。

「発表があるそうだ」

お父さんが唐突なことを言い出した。紗季さんが福田先生を連れてくる。先生の戸惑いが私でもわかるほどに。

「先生急にごめんね。人となりを見せたかったの。でも、合格です」

「……え、これは？」

「あー、うん。それはね」

紗季さんはすごく綺麗な笑顔で、先生の口元に人差し指を押し付けた。

「婚約を前提としたお付き合い披露会」

福田先生は鳩に豆鉄砲を食らったような表情をしている。私や朗希くんは言わずもがな。思考停止した私たちに紗季さんはとても魅力的な笑みで微笑んだ。

「サプライズ返しですよ、先生」

紗季さんが歯を見せながら満面の笑みで言う。見に来まった彼女の家族も嬉しそうに話している。

「……なら、君も言うことがあるだろ？」

「え？」

紗季さんが固まるが、先生は至極真面目に言っている。

「どう思っているのか自分の口から伝えて欲しい」

「え？　なにで？」

紗季さんが慌ててふためいているけれど、彼は追及を止めるつもりはないみたいだ。

「ちよつ、お父さんやお母さん、おばあちゃんの前だよ！」

「だからだ。皆の前でハッキリ言う！」

「……もう、分かりましたっ！」

先生が絶対に引かない態度を見せていることで、紗季さんが観念したように肩を竦めた。真つ赤な顔で上目遣いに彼を見る。

「……わ、私は、……福田さんが、好きです！」

その表情はまさに乙女そのものだった。今頃になって、頬が熱くなるのを感じているようだ。

その時、私のスマホが通知音と共に震え出した。美鈴ちゃんからだ。

『人生には甘さも必要なのだよ』

ミルクにホイップ状のコーヒーが一杯乗った、フォトジェニックなラテの画像付きで。分かった風な口聞いてくれるじゃん！ 返信しようとする、追加メッセージが届いた。

『帰ったら、カフェ行かない？ 話くらいは聞いてあげるよ』

口は悪いけど、私のことはある程度は理解して見守ってくれている。そんな悪友が、今は貴重な存在だった。

『了解』

そして、私は紗季さんに少しだけ意地悪そうな笑みを見せると、彼女は小さく、でも楽しそうに、頬を膨らませた。祝福に包まれた会場で、私は朗希くんの肩をポンと叩くと、彼は苦笑いをしたが、機嫌が良さそうな感じだった。

風も日差しもおだやかな昼下がり。そこには、ゆつたりとした明るく暖かい空気が流れていた。